尚絅学院大学　『学び続ける教師』養成講座 2022 教採対応

教職課程センターだより 第２０号

２０２１年６月１１日（金）発行・配信
尚絅学院大学教職課程センター

学ぶこと・教えること（1）

～ 『心よ，壁を越えてゆけ ～夜間中学教師・入江陽子～』を視聴して ～

先日の養成講座で，５月２５日にＮＨＫ総合テレビで放映されたプロフェッショナル　『心よ，壁を越えてゆけ ～夜間中学教師・入江陽子～ 』というドキュメンタリー番組を学生の皆さんと一緒に視聴しました。

番組に登場する入江陽子さんは，東京都の教員として採用されて以来２７年間，公立夜間中学の教壇に立ち続けている方です。現在は，生徒の多くが外国人である葛飾区の公立夜間中学で，日本語のイロハから丁寧に教え，日本で生きていく力を身に付けようと懸命に学ぶ人たちを支えています。国籍，言葉，文化の違いを乗り越え，個々の生徒が抱える事情にも寄り添いながら，心の交流を重ねていきます。

「夜間中学」は，正式には「中学校夜間学級」と呼ばれ，市町村や都道府県が設置する中学校において，夜の時間帯等に授業が行われる公立中学校のことを言います。２０２１年４月現在，夜間中学は１２都道府県に３６校が設置されています。学んでいる方の８割が外国の方です。

文部科学省では，夜間中学が少なくとも各都道府県・指定都市に１校は設置されるよう，その設置を促進しています。

入江さんと生徒たちの心の交流から，改めて「学ぶことと教えること」について考えた４年生の皆さんの感想を紹介します。

○番組を見て，使う言語，生きてきた背景が異なる人たちと学びの場を共にすることはどういうことなのか考えさせられました。入江さんは教える人たちの表情や授業態度，休み時間の様子からその気持ちをくみとろうとしていました。言葉によらない方法でコミュニケーションを取っている姿を見て，心と心を通わせるとはこのようにその人を大切にしていくことだと思いました。また，先生とのギターセッションをしていたトリスタンさんの表情や姿勢が変化したのは，先生との練習時間がトリスタンさんの居場所になったのだと感じました。夜間中学の教室は，学びたいと思って来ている相手の心，一生懸命に生きてきた相手の心に応えようと対話を重ね，共に学んでいく場なのだと感じました。

○教師にとって授業はとても大切ですが，その先にはいつも子供がいて，それぞれ違う経験や考え方を持っているということを意識しなくてはならないと感じました。子供の考えに耳を傾け，対話するために教える側も自分自身がどんな人間かを見せる自己開示が大切であり，一方的に教えることは違うということを改めて感じました。子供の心に寄り添い，「やりたい」を引き出すこと，心を通じ合わせること，子供との関係つくりをしっかりと行うことが教員として大切なことだと改めて思いました。現在の社会では様々な問題をもつ人がいます。その人々に対し，ゆっくりと粘り強く学びが身につくように支援をすることが，すべての教育の場で必要なことだと思いました。学校へ通う様々な人の心に寄り添う教育を行えるようにするためには私はまだ至らないことだらけですが，精一杯学び，子供の「やりたい」を引き出せる教員になりたいです。

○入江さんの考え方で印象に残ったことは，「ゆっくり粘り強く」生徒（子供）と向き合うことだ。この夜間中学は，日本で生きるために働いている外国人がほとんどで，「文字を習得する」＝「生きる力」を学びに来た人ばかりであった。入江さんは彼らに対して自分がこういった人間だとさらけ出し，生徒の言葉以外のコミニュケーションであるその人の表情から，その生徒の気持ちを理解し向き合う姿勢を大切にしていることが分かった。また，その人たちの文化や伝統も尊重し，過去の生い立ちや経験にも向き合うことで，「心で通じ合う」ことを大切にしていると知った。生徒と，一人の人間として向き合う入江さんの姿勢も素晴らしかった。自分は教師を「子供と関わる仕事，勉強を教える仕事」と考えている部分もあり，入江さんのように「生きる力を教える仕事」とするにはまだまだ経験不足だと思った。子供や大人に関わらず，やる気をどう支えるか，楽しいことがあるから毎日行こうという気持ちにさせる方法を教員として身に付けたいと感じた。

○「先生とは何なのか」ということを考えさせられる番組だった。この夜間中学の生徒には外国人が多かったが，教師と生徒との関わり方に「差」というものはほとんどないと感じた。一人の人間として生徒とどう関わるか。言語の違い，文化の違いは沢山あったが，入江さんはそれを生かしながら，生徒とのコミュニケーションを取っていた。コミュニケーションを取るということは，生徒のことをよく知るきっかけになる。様々な方法，形でコミュニケーションを取ることで，生徒も心を開いていっていた。先生は教えるだけ，授業するだけの存在ではないということを，強く感じた。生徒の目線で考え，認め，寄り添うことも先生には必要な役割であり，大切なコミュニケーションだと感じた。入江さんは「プロフェッショナルとは，子供のことを考え，最善を尽くす人」だと言っていた。子供のことを考えるとは何なのか，最善を尽くすとは何なのかは人それぞれであると思う。採用試験まで，自分なりの考えを見つめ直していきたい。

○この番組を見て，私は全力で児童生徒に向き合うことの重要性に気づかされました。夜間中学，小学校という学校の名前が違うだけであって「学ぶ場所」としては何も変わることはないということから，教師としてできることは何かということも考えさせられました。確かに教師という仕事は授業を教えることがメインかもしれませんが，それよりも大切なのは「信頼」や「心が通じ合う」ということを児童生徒も，教師も感じることだと思いました。「子供を全力で受け止め，一人ひとりの全てを知る，理解するということ」，「それらを教師自らが行動に移すことで，今までは見ることができなかった子供の変化が現れるということ」，「少しの変化は『大きな変化』であることを見逃さないこと」など，とにかく全力で向き合うことが教師として果たせる役割だと思いました。今まで私は，子供に希望をもたせるということをあまり考えることはありませんでした。そこが自分自身の思いの足りなさであると感じました。わからないことでも，難しいことでも，一生懸命に学ぶ生徒以上に教師の努力は欠かせないものだとも感じました。これからは今まで以上に教師が全力で子供と向き合うことの本質を考えていきたいです。

○一人一人と向き合うために，授業だけではなく，給食時間や休み時間なども活用されていた。「できない」，「教えることが難しい」とあきらめることがなく，ゆっくりと向き合うことが大切なのだと学んだ。子供たちと先生の心が通じ合ったシーンを見て，改めて自分も教員になりたいと感じた。お互いに認め合っていて，成長している姿を見ることができた。それと同時に，自分が義務教育を修了することができたことは「当たり前」なことではなかったのだと感じた。

（教職課程センター　特任教授　佐藤　佳彦）